



モノをぞんざいに扱い、簡単に捨てるようなシステムは、生き物も人間も簡単に捨ててしまふんじゃないか。生き物の死骸、つまり食べ物を簡単に捨てる。ということは、生き物の延長である人間も捨ててしまふということになりかねない。

実際に、私たちの社会は労働者を低賃金で雇って、体力がもたなくなったり、ちよつと使えなくなったりしたら、簡単に捨てる社会ですよ。あるいは、優生学、健康者の優越的思想のもとに、「障害者」というカテゴリーをつくって、人間として役に立たないかのようなレッテルを貼る社会です。

そうではなく、私たちはみんな不完全で、ちよつと返品された本のように傷もついているし、精神もいろんなところが歪んでいる。④そういうヒビをそのまま愛するということは、モノと非モノ、生き物とモノ、あるいは人間と生き物という境界を容易に超えていく心構えだと思えます。

藤原 今の私の感覚だと、地球全体の自然破壊の度合いは、また野球のたとえを使うなら「九回の裏」です。試合決着直前で、一〇対〇とか、圧倒的に突き放されているような厳しい状況だと思えます。

じゃあ、その絶望のなかで私はどうするのかというと、今、目の前で自然を破壊している、「捨てる」という行為から考えていくしかないんじゃないか。

私たちの生存環境を徹底的に壊しつづけているのは、ものすごくつくってものすごく捨てることでしか成り立たない経済システムです。それにブレーキをかけていかざるをえない。つまり、今までの、八回まで戦ってきたやり方を、ぜんぶおぼやんにしないといけないんです。そこで最初に手をつけるべきなのは、自分たちの毎日の暮らしのなかの「捨てる」だと思えます。私たちが毎日やっていたいながら見過ごしていた、しかし大事なこの行為から考えれば、ものすごくゆっくりに、ひとりふたりと墨に出ていけるんじゃないかと。

⑤「SDGs」という標語は、九回裏でまだ連続ホームランを狙っているわけですよ。でも、それはありえない。四球でいいから着実に墨を埋めていくしかない。そのひとつが、「生ゴミ」と名指しているものを再利用していくことです。

(藤原辰史「九回裏の『捨てる』考」『ちやぶ台』⑩ 特集「捨てる」『できるだけ』所収。一部改変があります。)

注1 日本出版社。

注2 傷がついて書店から返品された本を、「復活本」と名づけて再販売する本のブランド。

注3 日本ロックバンド。

注4 分類する。

注5 生ごみや落ち葉などを微生物の働きによって分解し、堆肥に変えることができる装置。

注6 野球のフォアボール。

問一 線部AとCのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部①とはどういうことですか。説明しなさい。

問三 ②に入る言葉を、三文字以内で答えなさい。

問四 線部③とありますが、「おじさんたち」はどのような思いでゴミを捨てていると藤原氏は見えますか。説明しなさい。

問五 線部④とはどういうことですか。説明しなさい。

問六 線部⑤とはどういうことですか。たとえに注意して説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

イトケはたしかにときどき臭った。

伊藤恵子、略してイトケ。愛称ではない、蔑称だった。イトケが近づいてくると、あの臭いが強くなる。風呂の残り湯で洗濯をした生乾き臭に、Aドクトクの酸っぱさが混じったそれを、私たちは貧乏の臭いと呼んでいた。臭いで貧富をはかれることを、本能的にわかっていた。

イトケは不気味がられていた。いつもぶつぶつとなにかを呟いていて、目を覆うほどに長く伸びた前髪の間からは、黒目がちな目がぎよるぎよると動くのが見えた。背が低く痩せっぽちで、服は常に人からのお古を着ているらしく、垢なかなかなのか、皮膚はまだらに黒かった。

私たちは彼女の名前を日に何度も呼んだ。ひそひそと、けれど本人にもしつかり聞こえるように、注意深く悪意を込めてその三字を発声した。イトケもイトケで、いつも向こう側の世界からこつちを観察しているような、誰も寄せ付けないような雰囲気を感じていた。その異様さが、ますます私たちが奇妙がらせた。イトケ。彼女をいじめるにはたつた三字で事足りた。

小学五年生だった。二年ごとにクラス替えのある学校に私は通っていて、その頃にはもう、イトケは学年の誰もが知る存在になっていた。だから新学期初日、クラスにイトケの姿を見た同級生たちは、ハズレくじを引いたとわかりやすく苛立ち、鬱憤のはけ口をさっそくイトケに向け始めた。

学校という小さな社会に足を踏み入れて、自分について学んだことは数あった。調子がいいのに臆病で、人の顔色が気になるのに曲げられない頑固さも持ち合わせている。楽しくしていたのに一定の寂しさも保っていたくて、みんなできて嬉しいうちに急にふらつとどこかへ行ってしまう。「ア 天邪鬼な」私を最初はみな面白がっても、慣れるほどに面倒がられた。そういう自分を自分でコントロールできないのもどかさかった。だから二人組を作れと先生に言われたら瞬時に全体の人数が偶数かどうかを目で計算したし、休み時間トイレに誘われないと、なにか致命的なことをしてしまったんじゃないかとひどく怯えた。

今度こそ失敗したくない。イトケがクラスにいることは、だから私を安心させた。イトケがいれば、私が最後のひとりになることはない。イトケに孤立をなすりつけておきながら、その「イ」感をこまかすために、彼女に悪意が集中する休み時間や放課後を図書室で過ごすことが増えていった。

注1 『はてしない物語』を読むと、いまでもあの頃に引き戻される。

いじめられっこで片親育ちの主人公・バスチアンは、学校にも家庭にも居場所がない。ある日バスチアンは町の古本屋で一冊の本を手にする。あかがね色に光る絹張りの表紙に魅了されたバスチアンは、咄嗟にそれを盗んでしまい、学校の屋根裏の物置に逃げ込んで本をひらく。

物語の舞台は、正体不明の「虚無」に侵され崩壊寸前のファンタジーエン。その国を救うためには、人間界から子どもを連れてくるほかないという。その子どもは、あかがね色の本を読んでいる少年で、名をバスチアンというらしい。本にはそう書かれている。

絹張りの表紙も、緑と赤の二色でBスラれた文章も、章はじめに描かれた大きな飾り文字も、図書室の本棚から私が差し抜いてきたそれは、バスチアンが読んでいる本の造りとそっくり同じだった。そんな仕掛けで物語の世界に引き込んでくれる本ははじめてだった。そのことも私をひどくCコウフンさせて、イトケの孤立も学校の面倒ごと、束の間すべてを忘れさせてくれる手助けになった。

なぜあんなことをしてしまったのだろう。

給食の時間、配膳の列に並んでいるときだった。イトケが列に並ぶと、その前後がすこし空く。毎日見る光景だった。なのにその日はやけにそれが気に障り、イトケの後ろに並んでいた女子の背中を私は押した。「詰めなよ」「やめてよ」「詰めなよ」攻防はしばらく続いた。それでも彼女が頑なに動こうとしないの

で、私はますます意地になって、イトケと彼女の間に割り込んで声を張った。

「べつに全然臭くない！」

夏の雨が教室の湿度を上げていて、マスクをしていてもわかるくらいにイトケははつきり臭かった。

イトケを救いたかったわけではなかった。いじめが起きている場の雰囲気になんて耐え切れなくて、身勝手に腹を立てただけだった。イトケさえいなければ。イトケさえ臭くなければ。イトケさえ貧乏じやなければ不快にならずに済むのに。その瞬間、私はクラスの誰よりも、イトケを恨んでいて。列が進んでもその場を動けずにいる私に、声をかける人は誰ひとりいなかった。いい子ぶりっこ。本音とは裏腹に、そんなレッテルを貼られた私は、その日から、イトケと並んで孤立した。

図書室の本棚の陰になるように座ると、地窓からは校庭で遊ぶ児童の足が見えた。

季節がひとつ変わっても、クラスからの無視は解かれなかった。誰とも目が合わなくなって久しかったから、たとえそれが足元でも、まっすぐ見られるなにかがあることは、私をいくらか安心させた。図書室の隅っこ、地上三十センチの場所にうずくまりながら、輪になって眺めている足や、連れ立って走っていく足を横目に見つつ、『はてしない物語』を読み進める日々は続いた。

物語は、バスチアンの現実世界とファンタージェンの世界が交錯しながら進む。

ファンタージェン再生の初手は、女王・幼ごころの君に正しく新しい名前を与えることだった。バスチアンはなぜかその名を知っていて、「月の子！」と叫んだ途端いよいよ本のなかに引きずり込まれる。

崩壊したファンタージェンを作り変える命を授かったバスチアンは、望めばその通りの世界が立ち現れる能力を月の子から与えられ、あらゆる欲望を叶えていった。でぶで X 脚の外見を美しい王子様の姿に、不器用で弱虫な性分を勇敢な力持ちに、現実世界でのコンプレックスを次々塗り替えた。荒廃した世界を花と緑で溢れさせ、憐れな者に光を与えた。①その能力は私をひどく渴望させた。バスチアンがファンタージェンでひとつ望みを叶えるたびに、現実世界の記憶がひとつずつ消えていく。そんなルールも恐れなかった。日々は忘れたい出来事ばかりで、継りつきたいものを探すが困難なくらいには、私はすでに現実を諦めていた。

けれどクラス全員からの無視は、ある日あつげなく解かれた。ふたたび友達の輪に迎えられて以降は、図書室通いからも遠ざかった。積極的に輪のなかにいなければ、その場に執着しなければ、またあの日々が繰り返されると怯えたのだ。

ファンタージェンを再生させていくなかで、権力を笠に着るようになったバスチアンは、共に旅をしていたアトレューユにも、幸いの竜・フツフルにも見放されかけていた。

②けれど私はその続きを読もうとしなかった。本は閉じてしまえば中で何が起きているのかわからない。その仕組みに縋って、ファンタージェンの国でさえ孤立してゆくバスチアンの時間を止めたかったのかもしれない。

「③あんなのことが一番キライだった」

卒業式の帰り道、私を呼び止めイトケは言った。彼女と目が合ったのはその日はじめてだった。

『はてしない物語』をおしまいまで読み切ったのは、それからずっと後のことだ。

記憶と引き換えに欲望を叶え続けたバスチアンが、最後に欲しがったものがなんだったのか。へ。欲すること。なせの真意にどうやってたどり着いたのか。あのときそこまで読めていたら、私はなにか変わっていただろうか。あるいは結局なにも気づけないままだったのだろうか。

いまもときどき考える。④記憶のなかで、イトケは私を睨み続けている。

(木村綾子「月の子」『本が繋ぐ』所収。一部改変があります。)

注1 || ミヒヤエル・エンデ作『はてしない物語』上田真而子・佐藤真理子訳 岩波書店

注2 || 切実にほしがること。

注3 || 「アウリン」の裏側にきざまれた言葉。「アウリン」は、「宝のメダル」とも呼ばれ、ファンタージェンの女王・幼ごころの君の代理人を表す印であり、これを授けられた者は、願いをかなえることができず、記憶が消えていく。

問一 — 線部A、Cのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 「ア 天邪鬼な」の意味を次から選び番号で答えなさい。

- 1 意地が悪い
- 2 ひねくれた
- 3 気が小さい
- 4 むじやきな
- 5 人見知りの

問三 — 「イ」にあてはまる漢字二字の言葉を考えて答えなさい。

問四 — 線部①のような「私」が、——線部②のようになったのはなぜですか。説明しなさい。

問五 — 線部③のイトケの言葉を、「私」はどのように受け止めたのでしょうか。説明しなさい。

問六 — バスチアンは、忘れてしまった現実世界での自分の姿を、物語の結末では受け入れて、自ら変わろうとします。——線部④とは、どういうことですか。

□ □ □ □ □ □

問六	問五	問四	問三	問二	問一
					A
					B
					C

□には記入しないこと。

解答用紙 「国語」

受験番号

( )

□ □ □ □ □ □ =

問六	問五	問四	問二	問一
				A
			問二	B
				5
				C